

門 二 9
號 2186
卷



安政三年五月夏刊行

地震預防説

宇田川興齋譯述

風雲堂藏梓

早稲田大學
蔵 31.1.12



瀛 往年

奉一て千八百四十四年刻子一テラ

ンツマガセイン書名譯曰和蘭寶函中より鈔譯セ

る者なり近時我邦諸州地震荐に發一山
川崩塞屋廬頽壞人畜の死傷勝て數ふ
るらむ其慘實に極まきり而して惑説恠
論次で行ハれ人皆驚駭度を失ひ惘然天
を仰き太息するのこ又曾て之を防き避
る術を知る者も一是を以瀛今辱稟准を

地震預防説

題言

得て此編を開雕するの舉何るに至り
噫此瑣々多る小冊其説固確實なる者と
雖未完備の書と稱する不足り然れども
も之を以て世の蒙惑を解き且他の善法
を發明するの一端となるはと何れハ瀛
に於て殊に歡喜堪ざる所あり
安政三年丙辰四月 宇田川瀛識

地震預防説

宇田川瀛興齋譯

夫天地間ニ發する景象の古昔に在て深く
人の稽考を凝せしもの多しと雖地震は於
るが如きは甚稀なり是を其諸變象の重切
ふして且おれは繼起する災害の忽にそへ
りさるる因となり村邑都府より全州國
土に至るまで之を爲す震盪せしめて暫時

に變りて忽慘毒哀むべき荒地となり最酷
一きハ或ハ其鳴動崩劈の勢數次休むとき
なまも曾て去きを避け減まる術を知る去
となりりあり嗚呼此地震の懼るべき實
に其字面を見ても満身已に悚粟を生むる
ものや云ふ處

地震の發するハ何等の理り由るもの系
るやと疑問ありんに切實よりて悞るべきを
う去きに答る去と甚難とまきやも前後名

賢の陸續として述る所の諸説を參考せば
亦頗曉明まゝ去とを得る前後の學者此
理小就て何事を説明せしや及ひ何様は此
景象を辨解せんと欲せしやの諸件を記す
るや頗無益小屬まきバ去に之を畧す
唯其地震の發する基原を以て越列幾的兒
カと歸せし説を擧るを以て足るりと抑
地震ハ地下に鬱伏せる雷氣より發するを
の小して夫の大氣の時令節を失ひ雷電雲

中より起ると一般の理あり今試に其雲霧ハ
輕虚散漫の水蒸氣より堅固凝聚の形
體なりと云さん小若し雷氣其中に起るバ
一搏撃ごやに全體便震盪を發するおと知
る也一是を以て推せば今我足底に發する
震盪ハ雲中より起る變象と同しく正に越列
幾的兒氣の地内より憤勃する寫照の外なる
さうの理自昭然たり此説の果して真理に
本つけるハ日常實驗の得る所なるが故に

其甚重切の名説確論多々言ハ以て之知
るゆきなり古の名賢神智を以て能く越列
幾的兒氣の性情より精通し雷電を控制する
術を發明せしに又其同一道理より基きて地
震を預防する一箇の法術を發明せり
地震を越列幾的兒と相干係して説出せし
ハ「ドクトル官醫ストウケレイ人名を嚆矢とせし
千七百四十九年嘯嘯英吉利國に發せし地
震よりして諸窮理家皆此議を一同せり其

頃「ドクトル、ストケレイ」名氏其考案を編述して、名其を王國の會社に頒配せり。爾後又「ウーゴ、パーテルベッカリア」名其議を主張し、且新に發明せる試験を添へて愈其説を盛よせり。然るとも其疑團常に釋けず其解をも所ハ唯理上乃論考のとなきハ酷真を得るよ似たりと云ふの外に言句を下を留り「ざぶ」一類の疑款中不屬せしなり「モン」トペルリイル」佛蘭西の都府の大學校の學士窮

理家「アブトベルトン」名氏此景象を就て他の大著眼を起し終身の力を竭して其理上の論を實事に驗し從來此説に有つたと能はざりし實力を添へて二十年已前「フランキリン」名氏の制作せる避雷線を傲りて地震を預防する法術を創製を今爰に「ベルトロン」氏が其を發明せし畧説を擧る。夫と尤の如く其延衰甚巨大なり其延地震の感發する延衰甚巨大なり其延

き及ふ大との廣遠ふく萬國免るく大と
能はさる變象を起す所以の原因ハ必も至
大の威力有る者ハ非れバ大を發するに
足らざるべし從來諸家述る所の諸原因の
中唯越列幾的兒の能く其變動よりて
遂に地震を伴へる大變災を續發するに足
るものあり或ハ一脉の大岳頂に無底の
地下に陥没し或ハ不意に高山地中より湧
出し或ハ無數の島嶼不測の海底に沈没し

或ハ海中より現出し或ハ彼に海を埋め或
ハ此に湖を生し郷邑を滅し州郡を覆へし
萬千の人命を瞬間に失はしむるハ豈慘酷
痛哀の事なるや
斯く強暴なる原由よりて地震を發する
所以の理自明なり此地震を見ら如き廣
大にして萬國免る所の怖るる景象
ハ電光或ハ水力より發する非も巨大な
る地底の塊片陥落するより發する非も

硫黄石腦油類の激薄をより發せり非
ぞ水蒸氣の張力或ハ水素瓦斯の爆炸或ハ
其他の物類の作用よりして發せり非
をハ此諸件を以て決して全地球の震盪を
充分明瞭せしむるは此故にチベルス帝即
位の十四年某日の夜中に發し亞細亞の
大都府十三處を翻覆し其廣袤大抵百里程
を徑じ大地震を以て夫地中の水蒸氣の
焚燒或ハ他物の爆炸より起原せり

爲せやきハトクトル、ストケレイ氏の算に
隨ふ其廣袤_{即百}の震盪を起す基原ハ地
中の深_十七十里の處ニ在る_徑一之を以て推
せハ其爆炸の勢根脚の處小テハ五十里小
散布し_{それより}上に向て七十里の間次第
に圓錐狀小開き昇り遂に地面に至てハ直
徑百里の廣袤を震盪せり此を以て觀
をバ「ストケレイ」氏ハ筆せし如く創見て火
藥を製出せし昔時より今日に至るまでの料

材を一時に用ゐるゝ爆炸する大と何とも箇
 様なる激動ハ起し得る大と何とも何とも
 然るを況テケルキハ一テルの僧官アウグス
 チヌス名人の説に亞弗利加に於て一瞬間に
 百處の都府を傾覆せし地震の如き大變象
 ハ亦甚麼様ニ其理を考窮するべき也
 但此怖るべき景象をバ一に越列幾的兒力
 又係するものぞ看做するべきハ其理自明瞭
 なるハ一此説ハ從ハバ地震ハ地底の雷電

ハ一唯大氣中の雷電よりハ越列幾的兒
 の分量多く其力勢更に強きを異るりと
 理學を以て大を推に越列幾的兒ハ容易
 く巨大なる諸形體は通し且少くも其力を
 失ふ大とあるハ著し之を遠きハ傳ふ
 又其氣を傳る導線幾許の長何とも同
 瞬間に其末稍了感通し甚速き地ハ傳るも
 曾て其力を減する大とハ佛蘭西の學士
 テル名氏銅鐵の線條を「子」河の水底

又、越列幾的兒氣を「地志を」
赫爾、勿、亞の佛蘭西に在る湖
水の、此湖水より「子」河起りて地中海
の湖中より海に引導せしむるを考
 定を、系、統ありて遠く引導せしむる試験も多
 ありければ、亦遂に其力の耗失せしむるを見
 る事なり。此故に越列幾的兒氣地内小於て
 此處より彼處に激發せしむる總て其氣の通
 及を、全地ハ必も一同瞬間に感激し而
 して其各處に震激せしむる勢ハ其別あり越列

幾的兒力ありと論議せしむる事を、頃ひきりな
 り越列幾的兒氣の迅速なる勢ハ大抵一秒
 時毎に五里若くハ其餘も達せしむる此故
 に譬へハ歐邏巴全洲を一震せしむる勢ハ就て
 云々、本大洲の中央より發せしむる地震ハ此
 洲の廣袤を、竟るに必も四面五百里ハ激射
 せしむる是を以て歐邏巴全洲の又一震激を
 覺るハ百秒時を、頃へきなり故に此震盪ハ
 本來此より彼に進行せしむる者なりとも其勢

極欠て迅速なるを以て畢竟大なるを認て一
 同瞬間に震激する者と為せざるなり但し他
 の説を以て之を推鑿せし究竟允當ありと
 する理何れも此に述る越列幾的兒氣小く言
 へば遠く相距たる地も能く同瞬間に震盪
 する景象を領會して疑ふ所なきなり
 地震ハ原来越列幾的兒氣の鬱蓄せざる由
 なるその形るときハ其迸裂せる景象を夫

の雲霧中に觀る所の雷電の景象と全く差
 異ありしを以て其兩象實に相並ん
 ず地震の將に發せんとき已前より必
 ず先づ空氣中の越列幾的兒氣に一箇の障
 逆を起すを觀る即異常の暴風雨劇しき雨
 雹及び其他諸の變象等なり八百二十二年
 に歐邏巴を翻覆せし地震ハ猛しき暴風雨
 と併せし發したり九百六十八年羅馬の東
 京ありし地震ハ劇しき暴風と薫發し

一切の植物を打潰し、閩國大饑饉となりたり千五百三十三年赫爾勿萎亞國より大颶暴風有りて同年數地震を發せり千四百五十年意太里亞の南部を翻覆せし地震ハ其前二箇月の間毫も風ありて淋雨日日打續けり又千五百四十三年意太里亞に發せし地震ハそれより先づ猛しき迅颶有り當時の震盪劇しく納波里に響けりと登時躬親其景況を目撃せるペトラルカ名人の筆

記に此夜の凄まじき状景實に天地萬物一時に消滅して其元行り還らると疑ハ其慘毒敢て紙筆に盡せざるは唯雷電暴雨海嘯の鳴動地下の震盪を薫たる怖るべき颶風の吼咆を聞くのと云へり又地震の間火炎を發せし處と屢あり大き地下の電光雷撃乃地上に迸出せしなりカリスチス名曰昔時の都會へり也及ヒリス名又バラの地陥没せし已前に顯ハ

前表二個あり皆人の意を留むべき所なり
即チゴロス地名小叢せし地震及び大なる火柱
の立し是よりプリニウス人名曰意太里亞の夕
ラシノニス湖を激動せし地震ありし時其
湖の水面徧く火炎布き蔽へりと云へり千
七百二十六年パレルモ地名に於て數百人性
命を失ひ多る地震の時其四分年の間地下
に尤怖る強き鳴動を聞たりし其間絶く
少くも暴風猛雨の蹤跡なく其後數條の火

柱地下より立昇り海に列りて去り遂に消
散せりと云千六百八十二年レモント
地名小叢せし地震より巨大なる火炎地下よ
り立昇りたり是を考証せしに其火炎ハ絶
て他物を焼く性なりと云是を越列幾的兒
の火炎乃本性なるハ人の明知する所なり
又地下より叢き鳴動ハ地震の一徴象と云
大學士ベルトロン人名の説に此鳴動を強く
越列幾的兒氣を受ふる導線より閃叢き

越列幾火の鳴動と毫も異ならずと云へり
此外又屢他の鳴動を聞く亦之を實驗せし
人の皆同一く其響動ハ雲中より發する雷
鳴と全く異ならずと語り是を實に地震
と天雷と頗相同しき徴と也此諸景象ハ越
列幾的兒を主として發する實に疑を容さ
ざるときハ地震も越列幾的兒氣の景象より
發現するものなる亦亦甚明なり
又一室の内小く地震の見象と等しき越列

幾的兒の現象を容易に生ぜしめて亦之が
試験を爲し得るに爰に越列幾的兒を施せ
る方隅の物一箇を置假に亦之を大地平面
の一部と定め其上に紙小く摸造したる互
に離を立てる小家屋幾箇を配置し假に亦
之を一箇の街衢と定む又手亦之を越列幾
的兒氣を通せれば即時に閃光爆鳴一方隅
の物震盪し紙造の小家劇しく激動し顛
倒し登時差高處に設けたる越列幾的兒驗

儀ハ自搖動一具空中の越列幾的兒の比例
 大なり為に障礙を生ぜる證徴を現もな
 り其障礙強盛なるハ颶風暴雨等を起すに
 至る也一此切要なる試験ハ蓋一アブトベ
 ルトロン名人のの著意に係きりと云へり此法
 小由をハ嘗に地震の見象乃性質及ハ原由
 を曉明するの事なり又少く地震を預
 防する術を試験一得る一
 ホンテ子ル名人が著せる「ヒストイレ、デア

カテミ名書に曰九造化の理を發悟する良
 術ハ先つ其理を領會一而して其事を成就
 一得べき原因に由る天造の者と同様なる
 見象を人為おと發一得る六と何るときハ
 先つ其事物を擬造して其本説を定むる事
 何となり是に於て復他人と商議せを隻眼
 を開ひて熟觀するときは今製する物の見
 象ハ天造物の見象と同原因ニ成り若く
 ハ六と甚相似なる原因ニ成立するを確

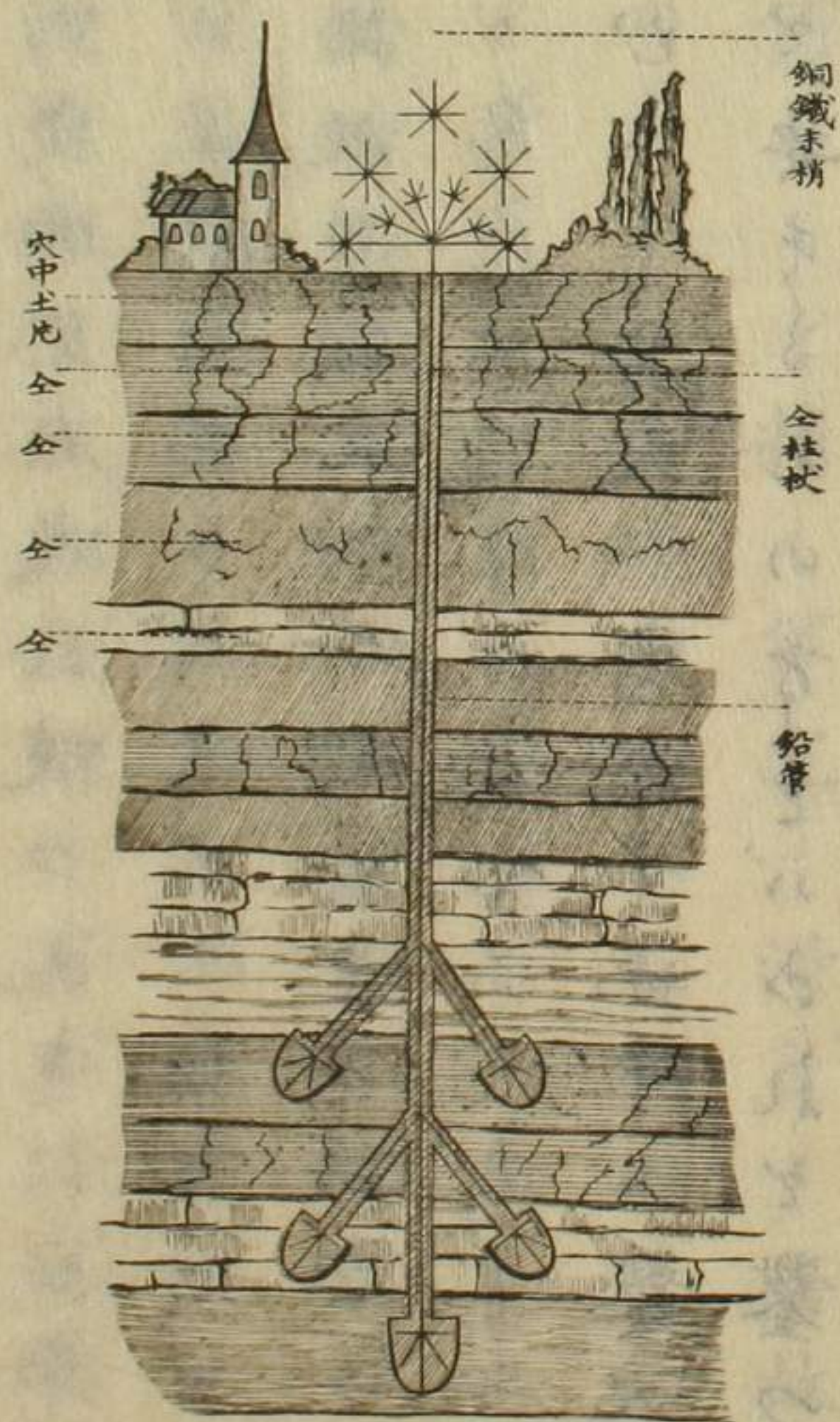
証するに至るは學者篤く辛勤して地震の原理を索知せし後又其怖るべき變象を預防する術を發明せんと心神を凝せし固より其事態の然るべき所なり凡そ知らざる所を知り未明にせざる所を明にして其學問を究る盡せるときは力を用以發して其効を世に施さん力を務るは當然の理なり其本義鬱塞して明ならずざるに方ては力を看破するは甚難き事

業なきども既に力を發明せる上ハ容易に其理を他物に擴充するを得るべきなり今夫の氣中の越列幾的兒小由る雷電を興む可如く正しく地内の鬱畜する越列幾的兒氣よ由て地震を發する者なるを知らば乃世間に通知せる避雷線と一様なる器機を設けて地震を避んとする意匠を容易に起すべきなり「アプト、ベルトロン」名曰千七百五十二年以前學術未だに開けざるの

頃に在て若し窮理學家卒に我雷を驅使し
自由に導きて其欲する所の地を降らし
及ひ能く其道路を教へ彼を制して必を指
示し多る方向に隨ハしむへしと云ふて其
説を主張せば當世の人皆舉て大に此議を
非駁するなるを然るに其後遂に其説の
果して正説たるを昭然白日の如くなる
を知り官俗共に概して皆避雷線の至當の
理に信服し竟に其法を据る其器を製し設

るに至るなりと云へりあるを以て推せば此
の如き地震を豫防する法術も亦發明を
きふありや抑雷の越列樂的兒氣を係る
大に銅鐵を以て引導すべきを其証とせ
蓋し其引導線ハ凡其意の欲する所を隨て
雷を地球及び空中に引致し今地震の
發するも固より是と同一なる越列樂的兒
氣を係るものなれば其怖るるを見象を
防く同一なる器機案を云に銅を用るべし

りして他の理ありんや是を以て大學師ベ
 ルトロン氏ハ實に初として其設施を此目的
 に達せんと思を凝せりベルトロン氏夫の
 地下に重積鬱伏して地氣と大氣の以準を
 缺ける越列幾的兒氣を以て漏去る一兒人
 が爲に銅鐵の柱杖を務て深く地中ニ刺入
 ろとを定む其柱杖の兩端一ハ地中に入一
 ハ地表に出ハ種々の末梢小分を其每梢
 悉く尖つて甚銳利なるんおとを欲を其地



下の每梢より地内の越列幾的兒を引き導
 き引導柱り傳へく地上の濛氣中へ送り遂
 におもを每梢の尖端より漏謝せしめて此

運動をして少しも間断なく常に流行せし
 るを以て一の障礙又震盪を起すおとを可く
 しむ尤引導柱杖の多少ハ各地平常何る所
 の越列幾的兒の度に随ひおとを以準して
 是れが差異を爲すへきおと亦自明なり又
 手其諸般の酸化即、銅、鐵、〔酸素の結合〕を豫
 防んが爲に其引導柱を鉛鉛にて造るる管中
 へ納むへし其穴ハ甚深く地中へ鑿入する
 おとを要するものなりハおれを鑿つての費

金幾何なるを精く算定し得るし其故ハ其
 深淺の多少ハ其地内に在る越列幾的兒ハ
 關する者なきハるり學士「ベルトロン」曰此
 越列幾的兒の定情を領得せば諸窮理家皆
 此地震を豫防する新法ハ同意をべし此器
 ハ元、避雷線と太相類似し其方法究竟同様
 の理を基けるも乃しして且其主能亦全く
 趣を同じく故に此器ハ於て實に其安全必
 用の功を致すものなりハ彼器ハ於ても其

功用益々亦差ハド又銅鐵の効力小由テ雷電を避べき大とを確徴セバ地震を豫防する法に於ても同様の効力を呈する大と亦疑ふ可く今又再ハ上説を反覆一述んに夫の地震ハ越列幾的兒より發する見象ハ一テ其現象ハ越列幾的兒の平均を障礙するより一テ著しく發するものなり正しく地中ハ在る銅鐵の末梢より越列幾的兒氣を吸入せられバ引導柱より大を傳送す

るを以テ其平均再ハ故に復一聊障礙を生ずる大となすと云へり此法術ハ未だ大に未ハ行ハるを國君大家皆此鴻大なる一舉を試驗する大とを果さバ其故ハ其説に従ハバ真に其成功を得る大や疑なきが如くと雖大を設施するに及んで實に必其効何りテ萬に一ハ失せざるものと豫定決を可くせられバなり然るとも既に前章に説明せる試驗方隅の物を

設も越列幾的兒力ふて地震の景象を觀る
 法方ハて夫ハ至小の處に於て著しく其怖る
 べき現象を發せしむる處とを決せしむべし
 トロンハ新發明の功用も試験に由て其証を
 得べき處と亦必しも抹殺ウチクヌすべき非を此
 地震を擬造する人爲の裝置に準して出さ
 べし「ハベルトロンハ」の豫防法を併せ設くるべき
 ハ越列幾的兒の漏出する勢小由て嚮ナにハ
 一齊に顛倒せる紙造家屋今ハ毫も揺動を

らふとなく且一の震盪を起せしめて越
 列幾的兒氣暗に其銅鐵の末梢より漏出
 更に其景象を露カするなり往昔地震小就
 て大に工夫を凝せし人何り其發明する所
 亦稍ヤベルトロンハの發明と相符合する所の
 何り其説に曰深き坑穴ハ地震の劇勢を避
 る安全の處なりと云へり此坑穴ハ地内
 と濛氣の際を聯絡せし易きハなり「ハプ
 リニウスハ」此説を信し地震ハ由て數劇クしく

荒さき一幾多の都府を命じて深井坑穴を
 其周圍を穿ぬふむべしと決せし由を記せ
 り是より已來頗る其災害の懼を減せりと云
 遷瑪人嘗て「カピートル」遷瑪の城を築きし
 時此豫備法を用ひしに其一部のみハ常に
 殆地震の激盪を受ざる故に此豫防法爾來
 次第に其國中を行はせたり一千七百年代
 の初に發せし劇しき地震の頃「タウリス」伯
西亞王も此變り遇しに伯爾西亞人其都府



の周圍小多く深坑大穴を穿たし其
 舉果して驗有りしや又ハ他の事故も由
 るおと存るやハ知る可しされともこれ
 よりして地下の振盪漸々に鎮まると云
 獨此深き坑穴のよみて猶既に斯く洪福を
 得るものなれば其數多の坑穴小夫越列幾
 的兒を地上より漏出せしむる銅鐵の引導器
 を具へば其大裨益ありと果して如何と
 や抑此正直なる深き坑穴小一箇の引導器

を安置せば恐くハ全國中おきぐ為に經久
 の安全を保有し得べきなり
 ベルトロン氏其發明を告小顯ハせしに當
 時の知識家此議ハ尤祖する者少るを就
 中意太里亞の窮理家ハ其本國多く地震の
 難何るを以て直に此説ハ同意し試験を以
 て必ぞ其實を得べきおとを証せり暹瑪の
 有名なる窮理大學師アブトカハルリ名ハ
 ベルトロン氏ハ發明の殊益何るおと及ひ

施設を爲すおとを委リテ公布しリテルの義會
 官目のヒセンシラ名人氏ハ千七百八十八年カ
 ラブリの納波ナ部リ小發せし大地震の頃地震
 の總説を著ハし其篇中佛蘭西大學師ルトベ
 指ロンの説を深く信奉せり又有名の大學
 師サルチ名ハヒサ意太里亞の一都會多に於
 て一書を著ハし地震を論じてベルトロン
 の説に尤祖せり以西把尼亞の王ハ其本國
 及ひ殊に米利幹所領小於て此怖るべき難

を蒙るはと常に酷しきを以て此地震豫防
法を發明せる人^{即ベルトロ}り甚恭謙なる
書を贈り大に此法の試験を爲さへしと然
るも全く其言辭のよみて其事ハ遂に舉
行ふに及ばずり一千七百八十一年大家^フ
フホ^シ名^人書をベルトロ^ンに贈て曰吾子が
所謂地震ハ毎に目に視るは足るべき火氣
を含有せざる越列幾的兒り基原をもるの説
全く予意小合へり予以爲らく大凡大地の震

邊ハ意太里亞等諸地ニ發せし如く其劇度
ハ能く其全地を荒れしに至るべしと雖其越
列幾的兒氣ハ一も物を焚燒する勢なく又
一も火焰を發するを見るおとなし若夫地
下の猛風暴颶其勢極めて劇烈なるも越列
幾的兒おきを助るに何れぞれハ地震の如
き猛列なる景象を發するに至るざりべし抑
ナボリア^{ナボリア}カタニア^{カタニア}の西^シ一^一府^府里^里亞^亞リ^リホウ^{ホウ}ル^ル子^子佛^佛蘭^蘭
一府^一の^の已^已上^上皆^皆等^等の^の諸^諸地^地に^に於^於て^て其^其最^最要^要なる^{なる}
地^地震^震多^多き^き地^地

事体を領會せしに至りば則ち吾子ガ發明
せる地震豫防の法を造建せしむと必せり
然るとも世の學者其深智を以て古來の迷
惑を開導せんおとそ何の時小何の如と
地震の危難を避んが爲に出の豫防法を建
制せしに當てハ實に幾鉅萬の金を費せし
き故を以て以て是を行ひ地あるを見
然るにあつに一言をいさハ「フランキリ
ン」名ガ初て唱出して當時未十分完成せざ

ハ發明の器「即避雷線の發明」を建制せしむ
爲に若一亦幾百萬の金貨を要せしむとな
るハ今に至て唯巧に其理を説のしつて鴻
益何の豫防法を現に施用せし地何の如
べ
地震豫防器の効力を強くしめんハ此器
を某の距離を以て數箇處に施しおきを
互に聯絡感通せしむべし「ベルトロン」氏
恰好此制を領會して凡都府の四面及び領

界の内又ハ火焰山の側及ヒ谷間平野等に
此巨大装置を施スルことを欲スルベシト
ロン氏其每地の怖ろしき災害を發スル猛
カニ以テ例シテ其法を施スルガ爲ナリ夫高
波猛浪の奔勢甚脆弱ナル堰堤を衝クハ其
力能波浪の怒激ニ堪ルことを得ズ忽潰決
シテ多少其造築ニ費ヤセシ人力金貨も徒
ニ亡失スル一然ルニ其奔流を數處に分岐
セシメバ其狂暴なる勢を奪ハレ堰堤能其

力ヲ當ルことを得テ波浪も亦能ク止スル
傷害も亦少ク得ル一是れ正しく其
分岐ニ由テ水勢を殺げバなり此譬喩の如
く先ツ越列嶽的兒氣を地下ニ吸収シテ
其を地表ニ引導シテ數處ニ分岐セシムル
道理を以テ較スル一但鬱伏重積シテ極大
劇シキ爆裂を起スル越列嶽的兒も彼の
數道の小流ニ分導スルニ奔水の如クな
ル一今其越列嶽的兒ハ其初ハ甚暴劇ニ

る勢何をも終り數道に分注する末梢に至る
るり及んでハ其勢甚緩漫して遂に毫も奔
激の勢を見ざるに至る
但地震を豫防する器ハ數多を装置するを
要するが故に亦きガ爲に必しも幾鉅萬の金
貨を費すると言ハ沿して知るべし其故ハ
當り此器を斯の如く多く装施するに
のなるも極えて深き坑穴を鑿る費金算
まへり亦且入亦を造成するハ必しも

爲に幾百萬の金貨を要する亦とを切實に
算定して其必然を證するときはハ其費を所
果して過多に失するの誤認あるべくも
るべし然れども斯く大切要にして過く去
り用何の大設施を企て爲すか當て縦令幾
百萬の金を費する聊支障何の殘き道理な
く且一亦きを設け爲すも及てハ其鴻績疑
何も亦となしや云ふとも亦きを非駁する
も乃果して幾人あるやヘルトロン曰入或

ハ余ガ此装置ハ夥多の費金を要するものと
に難ざる者アリん此固より爾り然れども
余將他の一端を擧て之を論せん地震よ由
て暴きたる景象ハ極て慘酷なる禍災
を遺し且其受る所の害殆常に算まべし
さるに至る人豈亦之を如何可争んや全國
之ガ爲に暴掠せし郷邑都府も覆亡して
古き敗瓦頽垣堆積して丘の如く萬千の人
民ハ地中ニ吞まじ或ハ殘傷を被りて死亡

もの等是皆怖るべき災厄の極と云ふべし
今豫防法よ由て累萬の金よりも至大なる
害を防ぎ得ば之を造るに豈費の大なるを
論まばけんや但此大金を出し募るべきハ
抑王侯大家の本務あり此他系統緊要なる
費金の記載數多と雖亦之を記すを須
ひぞ其故ハ此一法を設施するハ萬千の人
生を保全する法術ニ關るものなり是れハ更
に口吻を費するを須ひざるなり費金

ハ軍事の費金と以較し得べきも何ぞ況
 軍陣ハ間不義不正なる舉あり又壯麗なる
 宮殿を建築する費金と以較し得べきも何
 ぞ此預防法ハ納波里王ナポリに在てハ必そ大
 きを建制せんおとを欲そ是を其プリニス
 王王の時毀せし殘暴なる禍災の事を回思
 して其秀麗なるホルチホルチの納波里ナポリより急遽
 に逃避逃するおと既に二十回の上に出るハ
 なり葡萄ホルトガ王王も亦此例に従ハんおとを欲

を是を其二十五年已前劇しき大地震何
 て此國の首區首全く其殘暴を蒙り當時の敗
 瓦碎礫今なを其地地に散在せるを以てなり
 以西把尼亞王イースも亦其所領の兩地案國案及案ハ米
 地利利幹幹の兩地共に地震の難を蒙るおと數回
 り若夫全大地上地一民も恐くハ地震の
 爲に毀損し又ハ之が爲に殆死死に至るへき
 疵傷を蒙る者なると應し故を以て此
 數の諸王公侯互互に相約して現に今我曹の

住在此の不幸なる地球上の蜂起するものと宛一揆賊徒の如く夥しき残暴なる地震を驅逐せざることを余が希望む所なり
「ベルトロン」の説及び其述る所の緊要なる事件ハ大をを誤解するものと何る程なり
但し同氏大をすて徒に多少説話を費やせし可とも其卓出なる發明ハ亦或は施し行ハせざして有志者の希望する所とならざるの其舉用せられて實効を為さざれば果

して速なる歟或ハ漸を以ておきて歸する歟ハ豫知得べきか何れとも此事の或は舉用せざることを人々の我曹の固赤心企望する所なり然るとも嚮に「ブフホン」の贈言に或の學者智見を明瞭しして古來の謬誤を指し諭さんか何の時ハ在るべきやの一句お就て當に善く慮をあたりに致さべ

地震預防說終

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 國海山全野.

宇田川興齊譯述

安政三丙辰年孟夏

發行書林

淺草第町二丁目

須原屋伊八

